

たつのこたろう

「おい、おまえのおっかあはりゅうなんだろう。」

「そうだろう。」

「そうじゃないやい。」

「おばー、おらのおっかあは、りゅうなんかじゃあないだろう。」

「おめえのおっかあはな、わけがあつて、りゅうになつてしまった。」

「おっかあは、どこに、いるんじや。」

「ずっと遠い、北のみずうみにいるということじや。」

「おらあ、会いに行くー。」

「いや、いや、おめえは、まだ子どもじや。大きくなつて、つよい、かっこいい人になつて、おっかあをたすけるんじや。」

「いや、おらは行く、おばーおらは、きつと行くからな。」

山をこえ、また山をこえ、とうとう九つの山をこして、

北のみずうみにやってきた。

みずうみは、しま一つでも、入るくらい大きかった。

「このみずうみの水を、海にながして、そこへ田んぼをつくる事ができたら、村の人たちも、びんぼうせずに、どんなにしあわせになるだろう。」

「おっかあ、おっかあ、たろうだ。たつのこたろうだよ。」

みずうみはシーンとしたままだった。

「おっかあさーん、おっかあさーん、たつのこたろうだぞ。」

すると、しずかなみずうみが、ゆらゆらとゆれ、大きなりゅうが、あらわれた。

「あつ、おっかあ、おらだ。たつのこたろうだ。」

「あの声は、たつのこたろうだ。」

「おっかあ、どうして、りゅうなんかになつたんだ。」

「おなかがすいて、たまらなくなつたので、いわなを三びき食べたんじや。村の人も、おなかをすかしているというのにな。そのぼつがあつたんじや。」

「そんなことがあるもんか。たつた三びきのさかなを食べただけで、りゅうになるなんて。おっかあ、おら

あ、おねがいがある。みずうみを田んぼにしよう。村の人たちも、きつとゆたかにくらせるようになるよ。」

「たろう、おまえはなんてやさしい子なんだ。かあさん、うれしいよ。」

「水がないと、わたしはしんでしまう。でもみんなのためだ。よーし、あの山をくずそう。」

りゅうは、毎日、毎日、体を山におつけた。

山は、みるみるうちにくずれた。

ドドドド、ドーン。

水は、どんどんながれた。

ところが、りゅうは、体中きずだらけだった。

「おっかあ、おらをゆるしてくれ。」

そのなみだが、りゅうの目にかかったとき、人間のすがたにもどった。

たろうのおっかあがたっていた。

「おっかあー。」

「たろうー。」

にわとりと りゆう

優秀賞

「アガガガー、アガガガー、耳がいたい、アガガガー」
大きな、大きなりゆうが耳がいたいといってないてい
ました。

りゆうがひるねをしているときに、ムカデがまちがっ
てりゆうの耳の中に入ってしまったのです。ムカデはこ
まってしまった。

「ここはどこだろう。くらくてよくわからない。出口は
あつちかな。こつちかな。」

りゆうは、あたまをふったり、耳の中にゆびをさしこ
んだりしてみたがよけいいたくなるばかり。

「アギザビヨ、デージいたい、アガガー、アガガー、
早く、頭のいい人間にばけてみてもらうしかない。エー
イ」

りゆうは人間の子どもにばけて、物知りおばあのとこ
ろにいった。

「たすけてください。耳がいたくて、耳がいたくて。」

「だいじょうぶ。おばあがウートートーしてあげるから。」

おばあはおさげをそなえ、せんこうをたいた。

「ウカミヌメー、ウニゲーサビラ、ウートートー、ミミ
ノーチクイミソリー、ウートートー、ハートートー。」

物知りおばあがいっしょうけんめい祈つてもちつとも
よくなりません。

これは、医者にみてもらうしかない。人間の子どもに
ばけたりゆうは、町の中の有名な医者のところに行った。
「たすけてください。耳がいたくて、耳がいたくて。」

「こら、りゆうよ。おまえは人間にばけたつもりか。わ
しにはわかるんだぞ。アハハハハ。いたいのをなおし
てもらいたかったら、ほんとうのすがたにもどりなさ
い。そうしたらなおしてやろう。」

「わかりました。エーイドロン。」

「どれどれ大きな耳じゃなあ。アイエーナーこれはいた
いにきまつている。大きなムカデがかみついているわ。
かわいそうに。よしよし、いまムカデをとってやるぞ。」

「オーイ、だれかにわとりをもつてこようい。」
うらにわから一わのにわとりがはこばれてきた。

医者ほ、ひよいとりのりゆうの耳の中に、にわとりをなげ

とんぼのうんどう会

「よい、どん。」

「あかねちゃん、しっかりー。」

「べにちゃん、がんばれー。」

「きいちゃん、まけるなー。」

今日は、とんぼのうんどう会です。

とんぼの子どもたちは、はねをきらきらさせて、とん
でいきました。

「とうしょうは、あかねちゃんでした。」

「つぎは、楽しいすずわりです。」

「おでこでぼつん。しっほでぼつん。ぱっちゃん。」

「ぼんざい、われたぞー。」

「こんどは、つなひきです。」

「そーれ、オーエス・オーエス」

「がんばれ、オーエス」

「どちらもがんばるので、かちまけがきまりません。」

「とうとう、夕方になってしまいました。」

「ピーひきわけ。」

「今日のうんどう会は、これでおしまい。」

みごとにできたよ、うんどう会

そよぶく風も、こごごちよく

「うんどう会とても、たのしかったね。」

その時です。さつとあらわれた黒いかげ。

「あっ、こもりだ。」

「わっはっ、はっはっ、おまえたちのかえりを、まっつて
いたところだ。」

「わー、こわいよー。」

「おかあちゃん、たすけてー。」

「にがすもんか。からからひほしにして、じやりじやり
こなにして、おいしい赤とんぼのスープにするんだか
らな。」

「いやだよー、ひほしになるなんて。」

「じやりじやりこなになるのは、いやだよー。」

「だしてくれよー。うえーん、うえーん。」

「みんななかないで、さあ、どうしたらここからでられ
るか、みんな考えてよう。」

「へっへっへっ、あきらめたらしいぞ。なきやんだわい。」

「どれ、わしもひと休みすかな。」

「それ、今だ。うんどう会の時のように、みんなで力を
合わせて、このふくをやぶろう。」

「よしきた。いちにのぼつん。」

「さんしの、ぼつん。」

「バリ・バリ・バリ……。」

「やぶけたぞー。今度は、このなわで、こもりの足を
しぼってやれ。」

「そーれ、オーエス・オーエス。」

「こもりギヤングをやっつけよう。」

「たすけてくれー、はなしてくれー。」

「こんな悪いやつは、一本すぎにしばらくつけて、ひほし
になったら、じやりじやりこなにしよう。」

「ト・ホ・ホーじやりじやりはごめんだよ。」

「ゆるしてくれー。」

「やーい、ギヤングこもりがないているぞ。」

「ギヤングこもりに、かったぞー。」

「ぼんざいーい。」